

HEARTFUL

笑顔と心をつなぐネットワーク はーとふる

2022年
夏号

■特集

戦争をしない——世代を超えて語り継ぐ

【平和を願う】

鬼丸 昌也

認定 NPO 法人テラ・ルネッサンス 理事・創設者

【戦争を語る——広島から】

波田 スエ子

土橋 道子 被爆体験伝承者

| 連載 |

明るい社会づくり運動と SDGs

われら明社人「明るい社会づくり運動岩瀬・須賀川地区協議会」

ふるさとわが街



無償のボランティア

毎年、ゴールデンウィークの前後はニンニクの収穫の真っ盛りで、我が家は手伝いに来てくださる多くの人たちでにぎわいます。ニンニクと格闘する作業場は、誰かが家でのちよつとした出来事や悩みを打ち明けたり、それを笑い飛ばしたりと、いつも話題が尽きません。大変ながらも充足感で満ち溢れる時期です。

さて、そんなニンニク農家を営む傍ら、「明るい社会づくり運動」に携わり、今年で45年になります。昭和44年に庭野日敬師が提唱されて間もなく、同年4月に開催された初の地区大会となる「明るい社会づくり四国地区推進大会」は、香川県高松市において行われました。そこに参加した先達方の熱い想いを礎にした「明るい社会づくり運動さぬき」（以下、明社さぬき）は、全国に先駆けて発足した地区明社です。そして、「灯籠流し」「家庭教育」「清掃奉仕」の三本柱を中心に活動を続けてきました。なかでも、毎年8月に開催される「灯籠流し」は、今年で32回を数え、地元の方々が多数参加される夏の恒例行事になりました。

ボランティアの会員さん方は、猛暑の中で、会場の草刈りから、設営、灯籠流し、後片付けと非常にハードな作業の連続ですが、愚痴も言わず、黙々と頑張ります。大変な半面、非常に達成感を



長町 孝子

「明るい社会づくり運動さぬき」事務局長

味わえる行事でもあります。

灯籠が水面を静かに流れていくのを見ると、いつも感動を覚えます。肉体的にもきつい行事ですが、会員の皆さんは「ボランティアだからできる。お金もらうのだったら、こんな疲れるのはできない」と口々に言われます。苦楽を共にした仲間との信頼関係は格別です。

「家庭教育」では、地域の教育委員会と連携して、小学校や公民館、自治会館などに講師の先生をお招きして、子育て中の母親を対象とした講演会を定期的に開催しています。講演会の最後の座談会では、いつも時間を延長してしまうほど活発な議論になり、「明社さぬき」の根幹である「教育は家庭から」という理念の大切さをかみしめています。毎日、精いっぱい頑張っているお母さん方が、少しでも気持ちを変化させたり余裕を取り戻したりするきっかけの場になればと願っています。

しかし、この2年間、コロナ禍のため、残念ながら「灯籠流し」と「家庭教育」は活動を休止せざるを得ませんでした。最近ではウクライナ侵襲など、平和な世界は一瞬にして無くなる怖さを覚えます。だからこそ、私たちの小さな行動の灯火が、地域へ、社会へと広がっていくようにと祈る日々です。

耀メッセージ

- 1……**特集** 戦争をしない——世代を超えて語り継ぐ
- 10…… 明るい社会づくり運動とSDGs
- 12…… われら明社人
- 15…… 第22回(令和4年度) 通常総会報告
- 16…… Palネット
- 18…… ふるさとわが街
- 19…… 誌上名刺交換
- 20…… 掲示板

耀! 連隊 明社レンジャー

Contents

はーとふる2022年 夏号

【目次】

特集

戦争をしない

——世代を超えて語り継ぐ

1945年の終戦から77年を迎えました。

戦時下の記憶を語り継ぐ人が年々、少なくなってきました。

戦争の恐ろしさや悲しみ、傷ついた心の記憶が遠のいていきます。戦争の災禍を二度と繰り返さないためには、過ちから学び、一人ひとりの悲しみや痛みに寄り添うことが大切です。

今号では、戦争の悲しみ、苦しみを乗り越えてきた波田スエ子さん、被爆体験伝承者として活動をしている土橋道子さん、そして、「すべての生命が安心して生活できる社会（世界平和）の実現」を目的に2001年10月に設立された認定NPO法人テラ・ルネッサンス理事・創設者の鬼丸昌也氏のお話を紹介します。

戦争とは何か、平和はなぜ尊いか……。みなさんと一緒に考えたいと思います。

戦争は絶対に あつてはいけな いことです

広島に原爆が投下された日、私は爆心地から800m離れた広島市船入町の実家にいました。本当によく生き残ったと思います。

当時、小学3年生だった私は、5年生の姉と一緒に山県郡のお寺に学童疎開に行っていました。爆弾投下の前日に母が、「疎開先で充分なごはんを食べていないだろう」と迎えにきてくれ、実家に帰ってきていました。

ですから、原爆投下の前日の5日の夜は、久しぶりに家族みんながそろったことが嬉しくて、嬉しくて大はしゃぎしていました。

夕餉ゆうげの膳は、両親と4人姉妹と一緒に海老を乗せたそうめんを食べ、その後、ベランダで仲良くおしゃべりをしたり歌ったり……。寝るときは、末っ子の私は母

に腕枕をしてもらって、父と手をつないで床に就いたのです。

翌朝、目が覚めると父は仕事に、母も建物



疎開という、火事が起きたときに延焼をしないよう建物を間引いて空き地を作る作業をするために出かけていました。姉妹4人で留守番をしていると7時半頃に空襲警報が鳴り、防空壕に飛び込みました。しばらくすると警報が解除になり、「ああ、よかったよかったです……。爆弾落とさんけよかったね」と言いながら家に戻りました。

しばらくすると、一番上の姉が土間で、おなかをすかした妹たちのために大豆やカボチャの種を炒り始めました。土間の降り口の上の段に姉二人が、下の段に私が座って、おしゃべりをしな



波田 スエ子

がら待っていました。

8時15分。

「ピカッ！ ドーン！」

突然のことでした。何万個ものカメラのフラッシュが一斉にたかれたような光で目の前が見えなくなり、しばらく失神していたでしょう。私の名前を呼ぶ声が出て目を開けると、私は座敷の一番高いところに跳ね飛ばされていたのでした。5年生の姉からは返事がなかったのが即死だったのだと思います。

原爆投下の直後は何分間か会話ができませんでした。

私たち姉妹はよく喧嘩けんかしていましたが、そのときに、無意識のなかで「お姉ちゃん、ごめんね。洋服を黙って着たの」「あのときは私が悪かったんよ」「いや、あんたじゃないよ。私が悪かった……。」と、そんなささいなことを暗闇のなかで謝り合っていたのです。朝だというのに薄暗かったのは、原子雲の真下にいた

ためでした。

そのうち、暗闇の家のなかに火の粉が落ちてきて、「これは火事になるかもしれない」「助けを呼ぼう」ということになり、姉たちと声をそろえて「助けてー！ 助けてー！」と叫びました。しかし、足音は聞こえるのに誰も助けにはきてくれませんでした。

そのとき私たちは爆弾とは思っておらず、自分の家だけが何かで爆発したのだと思っていました。しかし、外ではたいへんなことが起きていたのです。皆自分のことで精いつばいで他人を助けてもらえなかったのでしょうか。

私は、小さな穴から光が差し込んでるのが見えて、夢中でその穴から外に這い出しました。目の前の光景を見た瞬間、驚きました。見えないはずの遠くの山が見えるのです。周りの家々はペレしゃんこ。

「お姉ちゃん、すごいことになっておるよ、早く出てこないか家が燃えよるよ」

と、這い出てきた穴に向かって叫びました。「タンスの下敷きになって苦しい……」「仏



壇の下になって動けんよ、苦しい」

そう言う姉たちの声が聞こえましたが、その声はじきに小さくなりました。それでも私は、「お姉ちゃん、早く出ないと焼け死ぬよ！」と何度も叫びました。いよいよ火の粉が降ってきて家の中に火が

つき始めると、私は誰かに助けを求めよと家の外に出て、その場を離れたのです。すると、外を歩いていてる人たちの姿が目に見えなくなりました。皮膚はドゥルーと剥けてぶら下がっていました。ずる剥けになった皮膚が爪のところで引っ掛かって下に落ちないのです。ちようど雑巾をぶら下げているようでした。その

幽霊みたいな人たちを恐ろしく感じました。防火用水のところに行つて、「助けてください。お姉ちゃんが下敷きになつとるんです」と言うのと、

「先に逃げときんさい。お姉ちゃんは後から出てくるけえ」

という大人の言葉が返ってきました。私はやっぱり「自分で助けなきゃ」と思い、家に戻ろうとしました。しかし、学童疎開をしている間に、以前に住んでいた家は「建物疎開」で取り壊され、引っ越してしまいました。それに、どこもかしこも家はすべて倒壊し、出てきたばかりの自分の家がどこなのかわかりませんでした。家がわからなくなってしまう私は、川土手に向かってゾロゾロ歩いていく人たちについていくしかなかったのです。

誰も私の手を引っ張ってはくれないので救助所までの道を何日もかけて一人でとぼとぼと歩きました。血が吹き出る程の怪我をしていましたが、恐ろしさが勝って痛みは感じませんでした。数日後、親戚のお姉さんに引き取られ、家族のことを探しました。記憶をたどった場所に二人分の骨がありました。しかし、もう一人の姉の骨は見当たりませんでした。そして、両親もどこでどうなったのか、いまだわからないのです。

私一人だけが生き残りました。土間の一段目か二段目か、これが生死の境だったのでしょう。座っていた場所が反対だったら私が死んでいました。家族みんなを失って、親戚のお姉さんに引き取られてからも、

食べ物不足するなかでしたので遠慮しながら食べていました。ときには、草を食べて空腹をしのぎました。

お姉さんに赤ちゃんができてからは、子守を任されていたので、遠足も修学旅行も行けませんでした。

16歳で結婚しましたが、戦後の時代ですから苦労は続きました。幸せな瞬間があったとしても「これも続かないんじゃないか」と思っています。それどころか、原爆投下の

前の日があまりにも幸せだったから、幸せに感じることがあるとその後のことを考えてしまっている。二人の姉を助けることのできなかった後悔で、私は、「自分は幸せになつてはいけないのではないか……」という思いに苛まれ続けてきました。

私は辛い子ども時代を過ごしましたが、私の子どもたちは無傷で、それぞれが幸せでいてくれるということを、言い表わせないほど幸せだと感じています。そして、次に生ま

れ変わってきたときは、ぜいたくは言わないから家族と一緒に暮らせる家庭で育ちたいなと思っています。

いま、テレビでウクライナ侵攻のニュースを見ると食欲がなくなり、当時は思い出して泣いてしまいます。体に負った傷は治っても、心の傷は、いまだ癒えることはありません。だから、二度と悲しい歴史を繰り返さないでほしいと願っています。

戦争は、絶対にあつてはいけないことです。

【戦争を語る——広島から】

平和の原点は相手の心の痛みのわかる人になるということ



土橋 道子

被爆体験伝承者

1945年8月6日午前8時15分、アメリカの原子爆弾「リトルボーイ」が広島の上空600メートルで爆発しました。0.2秒後には直径400メートルの巨大な火の玉になり、熱線と爆風と放射線が複雑に作用して広島は壊滅しました。

私は当時、広島県の呉市くれに住んでいて直接

被爆は免れましたが、母と当時1歳だった妹は広島市内にある母の実家に里帰りをしていて被爆しました。爆心地から2.5キロ離れていたにも関わらず、天井は崩落し、庭の木は燃えていたそうです。それほどまでに原爆の爆風や熱線は強烈で、母と妹も、かろうじて助かった人々も、原爆症に苦しみながら生

きていかなければならなかったのです。なかでも、戦争が激しくなり、児童は田舎の方に縁故疎開をしていました。その疎開中に原爆が投下され、8月15日終戦を迎えましたが、両親が亡くなり、学童疎開をしていた子どもたちは、迎えに来る家族も、帰る家もなくなりました。そうした何千人もの、原爆

孤児」たちは、食べるものも住むところもない深い悲しみのなかで戦後の時代を生き抜くことを強いられました。

母がそうした当時のことや被爆の話を私にするようになったのは高齢になってからのことでした。

原爆の影響で甲状腺を患った母や、体の弱かった妹の姿を見てきました。また、白血病で亡くなる同級生もいました。そうしたことから「原爆」に関心を抱き、「二度とこのような戦争を起こしてはいけない」という思いが大きくなっていき、いま、広島市の「被爆体験伝承者」として戦争や原爆の恐ろしさを人々に伝える活動をしています。

広島平和記念資料館は、被爆の実相、原爆の犠牲者や被害者の経験を皆さんに知っていただき、「二度と戦争を起こしてはならない」「核を使ってはならない」ということを発信していくための場所です。私たち伝承者はここを訪れた人たちに「被爆体験伝承講話」を毎日、交代で行っています。すでに戦後77年になり、子どもたちはもち



ろん、親御さんたちの世代も戦争を知りません。戦争と原爆の恐ろしさを次世代に伝えていくためにも、要請があればたとえ遠く離れた県外でも、どこへでも積極的に訪ね、伝承しています。伝えることで、少しでも理解してくれて、平和を築

く心をもっていただきたいと願っています。

強烈な熱線で全身大やけどを負った兵士。「お母さん、お母さん」と言いながら亡くなっていった中学生たちの遺品の数々。そうした写真とともに、当時の被害の話をします。また、どれだけ広い範囲に被害を及ぼす兵器だったのか、具体的に広島市内の地図

を使って説明すると、大人でも「知らなかった」とおっしゃる方もいます。私が、当時使っていた母の手作りの防空頭巾を持っていくと、子どもたちは「触ってもいいですか？」と関心をもってくれます。な

かには、現在、使用しているヘルメットではなく、綿が入った手縫いであることに驚く子どももいます。そして、原爆の話を通して子どもたちが幸せに笑顔で生きていけるということは、みんなが思いやりをもって仲良くしていくということだと伝え、話を締めくくっています。

子どもたちはニュースをよく見ていて熱心に勉強しているので感心します。最近、講話に行った先で、子どもたちから「ウクライナ危機」についての質問を受けることもありま

す。私は政治的なことや「どちらの国が良くて、どちらが悪いか」という話ではなく、いまをどのように過ごすことが良いのかを伝えていきます。それは、「挨拶をきちんとする」「家族や友人と仲良くする」ことです。つまり、身近な平和を大切にすることこそが世界の平和につながると思うからです。

平和の原点は相手の心の痛みがわかる人になるといことです。一人一人が主体的に考えていくという心がないと平和は築けません。原爆ドームは核兵器のない平和な世界を願うシンボルだと思っております。平和な世界を願って伝えていく場所だと信じています。

「二度と戦争を起こしてはならない」。私は、伝承者として、世界恒久平和の実現をめざして伝えていきたいと思っています。

*被爆体験伝承者とは 被爆者の高齢化に伴って、被爆体験をお話しされる方が少なくなっていることから、自らの被爆体験等を伝える「被爆体験証言者」の被爆体験や平和への思いを受け継ぎ伝える人です。広島市では平成24年度から「被爆体験伝承者」を養成しています。

平和を願う

鬼丸 昌也

認定NPO法人テラ・ルネッサンス 理事・創設者

子ども兵

子ども兵とは、武装勢力の支配下に置かれた18歳未満の子どもたちで、世界には、約25万人いるといわれています。私たちは、子ども兵問題に取り組むにあたって、2004年、子ども兵調査のため、当時、外務省の「退避勧告」対象地域であったウガンダ北部に向かいました。ここでは、政府軍と「神の抵抗軍（武装勢力）」が戦闘を続けており、神の抵抗軍は23年間で、約3万6千人の子どもを

誘拐し兵士にしていました。

ウガンダ北部で出会った8人の元子ども兵の中の一人、16歳の元少年兵から聞いた体験談は、未だに心から離れることがありません。彼は、12歳で神の抵抗軍に誘拐されました。その後、さまざまな訓練を受け、彼の初陣は、生まれ育った村を襲うことでした。そこで、自らの母親を殺すように、命令されたのです。

「1万人を超える18歳未満の子どもたちが、奥深いジャングルでの戦闘に従事させられていると言われています」



鬼丸 昌也 おにまる まさや Profile

特定非営利活動法人テラ・ルネッサンス理事・創設者。1979年、福岡県生まれ。立命館大学法学部卒。高校在学中にアリヤラネ博士（サルボダヤ運動創始者/スリランカ）と出会い、「すべての人に未来をつくりだす能力がある」と教えられる。2001年、初めてカンボジアを訪れ、地雷被害の現状を知り、「すべての活動はまず『伝える』ことから」と講演活動を始める。同年10月、大学在学中に「すべての生命が安心して生活できる社会の実現」をめざす「テラ・ルネッサンス」設立。2002年、(社)日本青年会議所人間力大賞受賞。地雷、子ども兵や平和問題を伝える講演活動は、学校、企業、行政などで年100回以上。遠い国の話を身近に感じさせ、一人ひとりに未来をつくる力があると訴えかける講演に共感が広がっている。

【連絡先】

NPO法人テラ・ルネッサンス
京都市下京区五条高倉角塚町21番地
jimukinoueda bldg. 403号室
公式ウェブサイト
(<https://www.terra-r.jp>)



当然のことながら、母親の命を奪うことはできないので、代わりに鈍で母親の手を切断するように命じられ、泣く泣く切り落とさざるを得ませんでした。神の抵抗軍はこのよう

なトラウマを植え付け、彼が脱走するのを防いだのでした。その何年か後、彼は戦闘中に傷つき、戦場に置き去りにされました。そこを政府軍に救

出され、病院で治療を受けることになります。その病院で、母親と偶然再会することができました。彼は「その時も、母は自分の話をよく聞いてくれたが、以前のように自分を愛してくれることはない、それが僕にはわかる」と淋しそうに語ってくれました。

なぜ、子ども兵が存在するのでしょうか。その理由は、3つあると、私たちは考えます。一つ目は、子どもは素直なので、洗脳がしやすい。つまり、戦闘上、使い勝手のよい「道具」となるからです。二つ目は、銃などの武器が軽量小型化し子どもでも使えるようになったことが挙げられます。そして、もう一つの理由は、私たち先進国の暮らしと密接な関係があったのです。

一例をあげると、ウガンダの隣国、コンゴ民主共和国があります。テラ・ルネッサンスが最も支援活動に力を入れている国です。ここでは、レア・メタル（希少鉱物）などの資源をめぐる戦闘が続き、1万人を超える18歳未満の子どもたちが、奥深いジャングルでの戦闘に従事させられていると言われています。そのような状況は、私たちが日頃、何気なく使っている携帯電話やパソコンなどの電子製品に含まれるレア・メタルが、この悲惨な状況を作り出しているとも言えるのです。

私たちの生活を変えることで救われるいのち

この現実には、私たちに痛み（ショック）を与えてくれます。遠く離れた紛争に、私たちも関係していたなんて、考えたくもないことかもしれません。けれども、私たちは、こう考えたのです。それは、先進国の日常生活の中に、紛争原因が存在するという事実は、私たちにささやかな「希望」をもたらしてくれるのだということ。なぜなら、その原因を変えれば生じる結果も変化するから。

つまり、私たちが、日常の暮らしの中で、何を選び、何を購入するかによって、紛争の予防や解決につながるかもしれないのです。

ところで、ウガンダでは、元子ども兵に対して職業訓練やカウンセリングなどの自立支援を行ってきました。たくさんの方の日本の皆さ

「どんな状況にあつたとしても、人はいつからでも、いつでも、いつまでも変わることができる。そして、他者を思いやることができる存在であると、支援の対象者から学ぶことができた。」



まの支援（寄附）のお陰で、17年間で300名の元子ども兵が、我々の支援プログラムを卒業することになりました。

約1年半、テラ・ルネッサンスの施設で職業訓練、識字教育などを修了し、その後は、自ら事業計画を立て、実行するといふもので

す。自立を目的としているので、補助金を支給するのではなく、開業資金は我々が貸し付け、返済をしてもらいます。開業当初は、わ



ずか2000円だった月収が、現在では7千円まで上昇した人もいます。ちなみにこの月給は、国家公務員並みの水準です。

大槌刺し子

最後に、話は変わるのですが、東日本大震災の

際も、岩手県大槌町の女性被災者に対して、自立支援を行いました。避難所にいる女性は、ふと気が付くと3・11のことを思い出し、非常に心が痛むとのことで、気を紛らわす意味でも「仕事」が必要でした。彼女たちには、洋裁や縫製の経験者が多く、のべ180名の刺し子さん（手内職を行う女性たちのこと）が、布巾ふきえんやコースターを作ることで、4千万円の収入を得ることができています。

当初、私は、東日本大震災の支援に関わるか悩みました。人材も資金も限られている中、国内支援と海外支援の両立はできない。国



内で災害が起きれば、「我々を見捨てるのか？お前らは、やはり差別主義者なのか」と思われ、今まで、現場で築き上げたものを全て失うのではないかと、悩んだのです。

そんな時、ウガンダの女性職員から電話がかかってきました。ウガンダでも東日本大震災の映像が放映されており、彼女は、これま

で自分たちを支援し続けてくれた日本人のために、何かしたいと思っていると伝えてきました。そして、私たちの支援を卒業した元子ども兵らと話し合い、わずか半日で5万円の寄付金を集めたのです。それは、自立に向けてビジネスに取り組む元子ども兵が、大切な売上の中から、捧げてくれたもの。公務員平均月収7千円の国では大変な金額だと、皆さまにもご理解いただけだと思います。

電話口で、彼女は、「これで毛布を買ってあげて」と言いました。そして最後に「同じ国に住むあなたたちは、何をやるの？」と聞いてきたのです。

その言葉で、我々の迷いは吹っ切れました。10年間は、被災地の皆さんと関わり続けるのだと覚悟し、先程の「大槌刺し子」を大槌町の女性たちと展開し続けています。

これまでの支援の経験から、どんな状況にあったとしても、人はいつからでも、いつでも、いつまでも変わることができる。そして、人は他者を思いやることができる存在であると、支援の対象者から学ぶことができました。だからこそ、一人ひとりの状況に応じて、きめ細かい支援を行うこと。そして、一人ひとりの可能性を大切にして、活動を続けていきます。